

〔三代實錄清和二十六〕貞觀十六年七月廿九日乙卯、太宰府言、去三月四日夜、雷霆發響、通霄震動、遲明天

氣陰蒙、晝暗如夜、于時雨沙、色如聚墨、終日不止、積地之厚、或處五寸、或處可一寸餘、比及昏暮、沙變成雨、禾稼得之者、皆致枯損、河水和沙、更爲盧濁、魚鱉死者無數、人民有得食死魚者、或死或病、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年六月戊辰、往々隕石於京師、其大如柚子、數日乃止、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜七年九月、是月每夜瓦石及塊、自落內豎曹司、及京中往々屋上、明而視之、其物見在、經二十餘日乃止、

〔日本紀略圓融六〕天延元年三月七日辛酉、亥時雹降、又大和國如水精玉碎之物降、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年十一月八日、大進僧都觀基參御所申云、去月十六日夜半、陸奥國芝田郡石如雨下云云、伴石一進將軍家、大如柚細長也、有廉石下事、廿餘里云云、

〔當代記〕慶長十五年四月九日甲申、三川國ノ山中、日近ト云所ヘ石降、大サ四五寸計ナル石五ツ、其砌天震動シテ如雷、昔寛喜二年庚寅、奥州芝田郡廿四里中、柑子程ノ石降、十月十六日ノ事也、如雨降ト云々、

〔雲根志前編三〕落星石 江州野洲郡橋村杉田氏説に云、元文中の比當村の百姓、夏日我後園に出てすゞみ居る、天にくもりもなく、風もなくして、空中に聲あり、目前に一石をおとす、取上て是を見るに、掌の大きさにして甚だかたぐ、重くして金色文理あり、夢溪筆談に、大星一震而墮地中得一圓石といふの類ならんか、

〔甲子夜話四十〕林子曰、今茲癸未○文 十月八日夜、戌刻下リ西天ニ大砲ノ如キ響シテ、北ノ方ヘ行

林子急ニ北戸ヲ開テ見レバ、北天ニ餘響轟テ殘レリ、後ニ人言ヲ聞バ、行路ノ者ハ、ソノトキ大ナル光リ物飛行ヲ見タリト云、又數日ヲ隔テ聞ク、早稻田ニ地名輕キ御家人ノ、住居玄關ヤウノ所ヘ石落テ、屋根ヲ打破リ、碎片飛散シガ、ソノ夜ソノ時ノ事ナリトゾ、最早七八年ニモ成ケラシ、是ハ